

國學院大學學術情報リポジトリ

國學院大學図書館所蔵『ひとりごち』大隈言道自筆
稿本 解題と翻刻

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2024-07-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 荒木, 優也 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002000697

國學院大學図書館所蔵『ひとりごち』 大隈言道自筆稿本 解題と翻刻

荒 木 優 也

大隈言道「二七九八〜一八六八、福岡の生まれ」は、「自分の生活に見合った表現を探し続けた歌人」（和歌文学大系七四解説）であった。それは「吾は天保の民なり、古人にはあらず」という、今そのときの歌をつくりあげていこうとする詠歌姿勢からもうかがわれる。さて、この「吾は天保の民なり」という言葉は、彼の歌論『ひとりごち』に見られる言葉である。

『ひとりごち』は天保年間「二八三〇〜四四」の末に成立したが（宇佐美喜三八『近世歌論の研究 漢学との交渉』和泉書院）、大正の中頃までは知られていなかった歌論書である。門下の真藤利明によって書かれた識語によれば、自筆稿本は安政四年「一八五五」八月の言道上坂時に利明に与えられたという（言道が大阪に上った年月は野村望東尼『向稜集』詞書による）。のちに、平岡良助氏の旧蔵となり、その翻刻本文は日本歌学大系八卷（以下「歌学大系」）等に収録された。この自筆稿本が真藤家から平岡良助氏に譲られた経緯、世間に紹介された経緯については、新開竹雨氏「大隈言道と「独言」」（『歌と評論』十卷九、一九三八。のちに桑原廉靖『大隈言道と私』海鳥社に再録）に詳しく紹介されているが、平岡良助氏所蔵のちどのように伝来し、現在はどここの所蔵に帰したかについては知られていなかった（『和歌文学大辞典』古典ライブラリー「ひとりごち」項では、その紙焼写真の所在のみが記されている）。

國學院大學図書館所蔵『ひとりごち』は、この所在が知られていなかった自筆稿本である。ただし、本書と歌学大系の口絵とを比較すると、伝来のあいだに虫損が生じていることがわかる。

本書と歌学大系の翻刻本文を比較すると、歌学大系の本文では読みやすさを優先させてか漢字平仮名交じり文で表記されるが、実際には漢字片仮名交じり文で全体が記されている。また、歌学大系では本文の削除・訂正を反映させたかたちで本文が作成されており、言道の推敲の様子を知ることが出来ない。加えて、適宜漢字をあてるなど表記が変更されている。ただし、これらは翻刻にも校訂を加えるという当時の一般的な本文作成のありかたである。

また、言葉が抜けている箇所も認められる。たとえば、「此本旨を心がけむこそ」（歌学大系四七七頁）は、「此本旨を失はずし（思惟）（ざらん（巻））こそ（思惟）」（九丁裏・一〇丁表）であり、「失はざらん」の言葉が抜けてしまっている。

以上のことから、大隈言道自身の推敲の様子、思考過程を知ることが出来るという点でも、本書は重要な自筆稿本であると考えられる。

本書の書誌

〈外題〉「ひとりごち」（左肩書題簽。表紙は、薄茶地無文の縮緬紙に似た紙を二つ折りにしたもの。本文一丁表・最終丁裏に汚れがあるため、現在の表紙は後補であろう）

〈内題〉「ひとりごち」（扉題。左肩に題簽を模した四角囲みがあり、そのなかに書かれている。紙は楮紙の本文共紙で、汚れが認められるため元表紙と考えられる）

〈巻冊〉一巻一冊

〈体裁〉袋綴

〈料紙〉楮紙

〈本文用字〉漢字片仮名交じり文（本文）

〈書写年代〉江戸時代後期（天保年間末か）

〈表紙寸法〉縦二六・五〇八糎×横一九・六〇八糎

〈書入〉朱による読点、朱訓、墨・朱による推敲・訂正等あり。

〈識語〉「此巻ハ我師大隈言道大人の大坂に登られる時／生がたとて奉書紙ニ歌六拾首と源氏年立三巻を／贈られるに添て蔵之 利明」（虫損部分は日本歌学大系参照）

〈蔵書印〉本文にはナシ。箱小口に「平岡氏蔵」（朱印）、箱蓋裏に「湛浩菴」（朱方印）「珍蔵」（朱丸印）が捺された紙片がそれぞれ貼付されている。湛浩庵は、博多の豪商神屋宗湛の茶室を玄洋社初代社長も務めた政治家・実業家平岡浩太郎氏（平岡良介氏の父）が買い取ったのち、茶室に名付けられた号である。

〈箱書〉蓋表右肩貼紙「大隈言道翁／ひとりごち」。箱小口貼紙「第号二六三番」、「大隈／言道□／ひとり／ごち」。

〈その他〉「ひとりごち 大隈言道稿本／平岡浩御出品」「ひとりごち／大隈言道先生筆／平岡浩氏御出品／184」とそれぞれ書かれる紙片、「大隈言道翁筆／ひとりごち 一冊／平岡氏」と書かれる書袋、文部省便箋に書かれた江島廉太郎宛の田山信郎（方南）書簡のコピー等を付属する。書簡については、本書との関わりが不明であること、またコピーという性格上、その内容については今は措いておく。

本文は、数日にかけてもしくは数度にわけて書かれたか。一一丁表四行目から一三丁裏最終行まではほかに比べて文字が小さく筆跡も細い。

推敲の過程であるが、本文が書かれたのち、まずは墨で推敲が行われ、そのあと朱で読点などが入れられたかと推察される。たとえば、六丁裏七行目の本文右傍の墨による書込「へさるへき理なし、」の朱による読点は、本文では

なく書込の文章のあとに付けられている。墨による推敲のあとに朱入れが為された証左であろう。また、一八丁裏一行目「己れこ、(見通)わへる(看朱)」のうちに」は、最初墨で見消し、のちに朱で元の字の「ろ」を書き込んだものであろう。そのため、最初に墨で推敲が行われたのち、朱入れが為されたと考えられる。

ただし、一一丁表の余白書込冒頭に書かれる○印は、本文の○印が朱で書かれているのとは違い、墨で書かれていることから、朱の書き込みが行われたのちに書かれた可能性が高い。墨の書き込み自体を比べても、筆の太さが違っている等が認められるため、何回かにわけて行われたのであろう。それを裏付けるように、二〇丁裏以降には朱の書き込みを墨で消した箇所が認められる。

したがって、本書は数度にわたって書き込みが行われており、そこに言道の思考過程の一端がよみとれるのである。

翻刻凡例

※本稿は、國學院大學図書館所蔵『ひとりごち』大隈言道自筆稿本の翻刻である。

※翻刻にあたり、できるかぎり原本に近い形で再現するよう心がけた。ただし、原本は推敲などの書き込みが煩雑なため、以下のような処理をして読書の便をはかった。

・冒頭の内題（元表紙の外題）と識語以外の原文はカタカナ表記だが、読みやすさを優先してひらかなで翻刻した。

・改行は／で示した。

・本文の右傍などに書かれた挿入文・推敲文や本文余白への小書書込などの煩雑なものに関しては（〇〇〇〇）内に入れて、該当本文の下に示した。なお、朱書の場合は（朱）と示した。たとえば、朱による右傍書の場合（〇〇〇〇）は、

「該当本文（○○○○^{（右朱）}）」とする。

・濁点、読点は朱で書き入れられているが、煩雑を避けるため（朱）とは示さなかった。ただし、墨色が朱でなく黒である場合は、横に（墨）と示した。

・項目ごとの頭にある○印は朱で入れられているが、煩雑を避けるため（朱）とは示さなかった。

・合点はへ（庵点）で示した。

・虫喰箇所は□で示し、判読ができる場合は、□内に元の字を示した。また、歌学大系等に該当箇所がある場合は参考にした。

・墨消等により判読できなかった箇所は■で示した。

・重ね書きはゴシックで示し、元の字を判読できた場合は（ ）で示した。

・「トモ」や「コト」は、合字一字で書かれている箇所が多いが、それぞれ「とも」「こと」と示した。

ひとりこち

「(二丁表。元表紙か)

(*以下、識語以外の原文はカタカナだが、ひらかなで翻刻した)

○僕(われ)かりに木(木)偶(偶)哥(歌)と号(け)たる物あり、魂(たま)靈(しる)なくて姿も意も／昔のものなり、かゝる歌は千萬首よめりとも、箆(へら)にて水を汲(ひ)がごとし、／當(いま)世人(の)のうた此箆(へら)を不(な)漏(れ)はすくなし、しかるに是木偶(こ)、何年せば／靈(たま)や入(い)きたらん、僕(われ)つらく田舎人のうたを見るに、木偶(こ)にて世を／終る人多し、古人は師なり、吾にはあらず、吾は天保の民なり、／古人にはあらず、みだりに古人を執すれば、吾身何八、何兵衛、／なる事を忘る、意のうはべのみ、大臣の如くなりて、よむうた／さぞ尊(たう)きことにもあるべけれども、そは賈人の冠袍をきたる也、」(二丁巻)

全く真似にて、歌舞妓を見るかごとし、或うたよみに喩して曰、／真似ならば易き物、歌舞伎役者も菅丞相になると、まこと／菅相公たらんと欲する者、俳優の如くせんや、又古歌の如き／うたよまんとする者、藝の如くせんや、善人たらんと欲せば、先心(しん)より／はしむへし、善歌よまんと欲せば、先心(しん)よりはしむへし、心を種として、／吾うたを咏するに、俚心俗意、もとよりにて、いまた風姿髣髴(ふうしほふ)たることを不得、年を経月にわたたりて、漸にすこしつ、

／古人に。○近(ちか)づく、(在)全く不(な)似(に)を以て、古人にちかすとす、古人によくいたる」(二丁巻)

を以て、古人に遠しとす、古歌を学(まな)ぶ道(みち)のいと／はるか／なるを知へし、／

○うたは身分と、別に引はなつものにはあらず、されど今人／のうたは、人事と別ちて両途となると、頼山陽が云し

／歌(うた)を以て歌とすといへり、吾兼て歌と云物を讀(よ)べからずと云、此謂なり、／

○強て雅みやびびをかざり偽いつはりはらは、後人に天保の御世をく／らますなり、後より顧おも東あづまても天保年間は、如斯ごとあり」（三丁巻）

しと、歌の趣おもしろにちしるく見えん（朱書）卜うらな社やしろ、哥の正道にてあらまほしき／わざなれ（朱書）、もとより、今の御世、昔にすぐれたること多ければ、／偽りかざらは、たま／＼真の事あらんも、偽におちて、口惜／＼かゝるへし、昔太平記著作の時、足利直義、撰者玄惠／＼に語て、自らの悪事をしるせる所は、焼失すへしとありしに、／玄惠か曰、焼べからず、さあらば後代の人、又焼失の咎を／記せん、願くは公の政道正しからん事をといひし、まことに／＼さあるへきことなり、」（三丁巻）

○この木偶歌を見るに、詞心ともに昔の人の物なれば、／いとあはれにめてたし、今人吾意をよむは、吾物なれば、／歌からあしく、詞思ふまゝにならて、あるは変体（重書）なり、／ことやうなる歌となる、今の新刻鯨玉集などのうち、／ことやうなる哥多し、これは木偶歌よりいとをとり／＼て見ゆれと、未熟のなすところなれば、年を経て宜に至る／＼へし、かの木偶歌は、是よりもはるかに淺学にて、い」（四丁巻）

また己かうた讀んとする志（見書）（礎いし）さへ無なり、まことに難き道／＼なれば、さやうに古人のやうに、容易に咏まる、ものにはあ／＼らす、己れも十二三年以前までは、此木偶を讀てそ／＼ありし、この木偶歌、いにしへの集に入ても、まかふ物なり、さ／＼あるへき理なり、しかるに古人にまかは、夫にてよろしかるへきか、／後世より見てわかつちなくは、夫にてよろしかるへきかと、心／＼つきしより昔の集ともを、よく／＼見るに、口真（見書）の歌も」（四丁巻）

見えぬにはあらねと、すへては新正なる物にて、吾咏と／ならぬはなし、秀佳句目さましき歌は、よく人の目に。〈立
て、(五本)〉新正／なること見ゆれと、後人(見消本)よりは何の事もなきやすらかなる、／歌に、新正あること。○。○。後人より
は(五本)甚見えかたし、三代集を始め代々の／集の歌の内に、此何の事もなきやうに見えたる歌に、／新正ありて、
吾物なることをしらは、道にちかつきたりと／思へし、吾神(ひ)の止ると止らぬとにあるへし、月花にも目の／とまる
と止らぬがあるへし、(海流恵) 〱 (五丁巻)

・へわたの原、こきいて、見れば、久方の、雲居にまかふ、沖つ白波、／
(百人首末)

このうた、よく古体をよめりと、古人もいへり、かの形ちのみ／うつせる木偶の類ならず、場所たかへるを知へし、
まればこそ／古風(見消)のかたしとはすれし、(七カ) 萬葉詞のみにて作るうたは、心は／今の卑俗にて、かの町人の衣冠なる
を、こゝろつかでは、／吾も古人の(見消)へになりたるを、心地すへし、靈魂を失なへる時なり、／
・へうめか枝に春と鳴つる鶯の行へも見えず雪はふりつ、／
(梅園一枝末)

〈言道曰一二の句調今少しと思ふことあれとそはこゝに云かたし(左)〉 (五丁巻)

このうたいとあはれにめでたし、彼木偶ならず、されと／木偶のうたよみより見ては、あはれなるのみにて。○。○。其
場所かはれるに(五)見えぬ／所あるへし、その差別已れも十ヶ年ばかりこそ見出／たれ、(余目書込) 桂園一枝の哥／
大ぬさの内／○すへて在ふりたることをよむへしといふは初心にをしゆる一端にしてさるは初学の人一ふしをい
んと／する時は忽調みたれ理りとほらさるにいたるか故なり此叟たちは是を学ひてよしされと／まことは珍らしか
らすふりたる所をのみ学へけんや)／

○無情の物に、心をあらせて詠が、歌の例なりと云事、／あらぬ教さまなり、何そわざと意をあらせんや、己か／今日の言語に氣のつかぬをしへさまなり、心をあらせ／と云がうたを作るよりのをしへなり、／〈余自書也〉○一首の上を不解してめくらとがめに咎むるはいかゞ〕(清原忠) (六丁巻)

○近世詞の延約へめと云事あり、これも前条に同じことにて同／しくは清原忠のひち□みと云へし、己れ私世々の人に詞をのべたりちゝめた／りすべけんや、自ら伸たり、縮みたりするなり、近世の国学／家、みたりに延約を云も、あたらずこと多かるへし、／

○うたを咏者は、冠を着たる心にてよむへしと云いを／しへたる人あり、これも道にとりて妨あり。へさるへき理なし、(冠)貴人は貴人、／下賤は下賤、世人は世人、隱逸人は隱逸人、老、弱、男／女、皆別々に己れ冠か〈相應冠の冠〉うたあるべければなり、／〈下をまたがり、下方余自書也〉又稽古には女なりに男なりなり老なりに少なりなり物にかはりてよむこと／古今同し／それはその／かはり／たる／事を／端書／に／すへし〕(六丁巻)

○五雜俎と云書に、書法○画中の人を論する所に曰、畫に似せんと欲／するものはこゝを去こといよく遠しといへり、又曰これはひとり／書家○画中の人のみにあらず、画家、詩歌、文章家、皆し同といへり、／うたも又さることなり、〈下余自書也〉性は相近習は相違)／

○周南峰之詩／

閑閑風騷萬卷詩 拈花摘葉尚新奇／

莫嫌句裏無唐律 唐句吟成不入時／

此詩いかにも感ずるに堪たり、されど新奇のみ求むるを、」(七十一巻)

わがにして止まらんや、吾心の置所さだまりたる上は、是よりこそ己か嗟歎と歌とひとしくならんの出
 たるなむ(見道)まれば、今の歌よきこといまたすくなし、何ぞこのまゝにてやまんや、

○己れかうたを卑しといふ人あり、下賤なればさも在へし、又異体なりと云人あり、さる歌もあるへし、皆未熟の致す所なれば是非もなし、然るに己が心を咏じて、古人に／向は(重書)ん(重書)の志ある人、此所を不過して、直渡する梯あらんや、」(七十一巻)

己れいまた其近道をしらず、すへて世中の諸道、／近道と云物なし、むだ道なきをこそ善とはすへき事なれ、／此道を経すし(見道)へすし(在)て行事、いと難き○へことなり、(在)凡てさる人も、世に／あるへからず、菜摘水汲仕へてこそ、法華経も得し／と(見道)ま(見道)拾遺集にもよみたれ、木偶歌をよみて心を／安んじたる人、己が心をよまば、忽ち(重書)毒(重書)ちたよりも卑しきうた出来、(重書)わかちたよりも(重書)へ(重書)忽ち(重書)異体なるうた出来、」(八十一巻)

ざらんや、哥の道は公にて、哥は私ものなり、思慮を加へ／左右の善凶を顧てさて其後に、(重書)云(重書)出る物にはあらず、(重書)物に觸事によりて即座に感發する、咏歎なり、／詞の近古などを撰むいとまあらんや、今日獨言して／うそふきあるくが歌の元なれば、歌を以て歌とすると／は天地のたかひあるを知へし、京師香川景樹か云、／歌は思慮を加へき物ならねはいにしへに似せんとする」(八十一巻)

いとまあらんや、吾これを似せたらば、やがて飾れる偽のみ、／又似せんとして似へき物ならんや、是を似たりとおもへる、／いとあちきなし、今の 大御世の風は、後の御世にうつ／らん后こそ、あきらかには、回頭かへりみられんといへり、まことに／しかなり、／

○鈴屋翁の、うひ山ふみに、歌の論有、其論うたを／作り物にゆるしたる趣なれば、己れはとらす、いかにも後世／作り物に落たれと、其作ると云うちに別ちあり、根より」（九丁表）

うた不_レ作して出来る物ならんや、三十一字のかきりあれば、／自_レ忽_ト然（見附）に（看）あらはれ出_ルぬ物と本_トとは（見附）ぬ物なることは（看）論もなけれど、前に云自／然のひとり言などは今いはんとてかまへていひ出る物に／もあらず、

自が誠忠よりふと云出るなれば、自然の物と云／へし、其獨言則ち咏嗟なれば、哥なり、是はこれ作り／物にはあらず、こゝがうたの根元なれば、其意をすて、／作りものにゆるしては、本意をうしなふなり、譬へ未／熟の内。へいまだ（看）、作り物を為（上）なら（見附）へ（見附）ふ程（見附）にも、此本旨を失はずし（見附）ざらん（看）」（九丁表）

（見附）こそ、年を経て妙處にいたらんの道はふみ別けめ、／かのうひ山ふみに云（見附）へるか如く、後世に至りて實情を／よめるは、百に一つも有難く、皆作り事になれ、は、作る／へしと云て、此度は新体のうた、此度は古体のうた、／御望ならば、いくつにても古体を作らんなど、云ては、／作り物に墮落せり、すべてかゝること、哥の上にあること／ためしなし、此度は何の体など、かまへずして近古の體、／うちま（見附）ぢ（看）りて出来るぞ自らなる、真目（見附）なる時は、真目」（二〇丁表）

なる哥出来、滑稽なる時は洒落なるうた、かの俳諧／＼など雜りて出来るが自然なり、俳諧とて別にしるし／＼集めたるは、撰集の時の事にこそあれ。○又彼(看本)かのうひ山ふみに／＼小(見消)る、今人實情のまゝによむをよしとせば、今人は今の／＼世俗のうたふやうなるうたをこそ、よむへけれど云へり、／＼是は譬へをよくえさる言なり、世俗のうたふ歌中々に／＼あはれにて、作りものよりよろしき哥いくつともなし、／＼つたなけに人もおもふらめと、／＼くもらはくもれ箱根山はれたとて於江戸が見」(二〇丁表)

ゆるてはなし、など謡ふは、調も自らなりて、はた秀句／＼ならずや、この秀句も、歌。〈詞(看本)〉にもとめて本旨を得る(重書)や〈こと(看)〉／＼なし、自然の嘆語にあることなり、秀句のことは後にいへり、／＼

○俗人は俗を以てせずんは不尊、雅人は雅を以てせずんて不尊、事物好／＼悪、雅俗によつて人情反覆す、野人の争論は、野人の長などの判をよく／＼きくへし、賢者の判耳に入かたし、君子小人自ら好悪を異にするなり、歌も／＼達不達にて善凶ことなること多し、(余言書込)○月花草木(雨書)のあはれをも現に見しらて歌の上のみにて人の歌の吉凶／＼を云はたかふ／＼ことあらん／＼○初心をもて己達をうか、ふは大やう違こと／＼多しと景樹もいへりへ山のはに棚引しつむ白雲の上より出秋のよの月／＼棚引切れしみねのよこ□□／＼わかうたよむ人ならてはうたの論はしがたし(満点巻)／＼

○江府平春海(の)が或人と争へる来復の文章に、さるあらしひがまし／＼きことはせし、月花を見る身のいかで物あらがひは得せしといへる文あり、」(二丁表)

あらしひがましきことは、せぬかよきは元より未もま(見消)なり、然るに此月花を見(み)身(身)る／＼身とあるがなへて。○〈哥人は五〉隠逸家になりなんとす、歌はさる物にては無(し)前(まへ)にもいへるか如、／＼謝家は謝家、世家は世家、貴、賤、老、

は国学家の身にこそ（見消本）なるべけれ漢意佛意をさけ、さてうたをよまは、自ら大御国風のうたも（見消本）出来まましを（見消本）ぬらめと（石巻）、（見消本）いれと（石巻）「吾国（石巻）」昔より儒佛を用ひたまひ、今世人それにそみて生たる（見消本）民なれば、それを除くと云ことあべま（見消本）まことならず（見消本）「えかたし（石巻）」、亦除かるべきことにもあらず、何事も（見消本）時の政にまかせて、左右の尊卑事物の善凶もさたまることなれば、世にまかせて、此うたのさまも心得べきなり、其世のあやまりは（見消本）其世のあやまりにて、哥（見消本）人のあつかる所にはあらず、呼子鳥が猿ならは（見消本）さるにてもよし、わかりきたら（見消本）は其時（見消本）よみもなほすべし、」（二三表）

○水鶏のかとた、くとよめるは、もと人まつ人の心よしかの鳥のなく声（見消本）さへ、人の門た、くかとき、なせるなり、さるこ、ろを失なへる哥、今（見消本）の世に多し、つ、りさせと云虫も、衣ともしき人の秋の寒くなるに（見消本）よりて、虫さへつ、りさせと云かとき、たるなり、二つながらその（見消本）本意をうしなひては、よむ意違へし、

○うたを頻りによまんとし、風流をしきりにせんと思ふは、花に面を付て（見消本）見るにひとし、餘りに立入過て見えかたし、前に有地をとりて見ねは、花のあはれも、人のよしあしも、見えかたし、古人と立ならひたるおも、ち（見消本）し、風雅をすれと（見消本）「るは（石巻）」、これは湯の沸あがれるが如く、まこと（見消本）のとりどめはいと（二三表）

すくなし、そのわづか残れる所、己かまこと持前の風雅なり、強て（見消本）風雅を作り添たるは、的切なるうたも出来ぬ事なり、木偶歌と、真の歌との境、此所に在へし、真の風雅は己か本心を先として、月花の惜き情を悟り、杜鵑（見消本）のをもしろからぬ声も、あはれになり、霞をあはれみ、露をかなしむ（見消本）「み、（石巻）」昔人のあくかれしも宜なりと、まこと知（見消本）時ぞ自らの風雅心には基きぬへき、唯うたは花月を誉はやす（見消本）ものと心得たるは、またし

き程のこ、ちなり、／

○博多福岡にすみながら、其地をよめるうた當世すくなきは何ぞ、／博多とよめる哥、續風土記にも數々見えたるを、しらざらんや、福岡と／唱へはしめたまへる、名をおきて、福崎など、書人あらぬ心得なり、」(二二七巻)

○英一蝶か画、徹書記か哥など、其世にて異体といへる／沙汰あり、師に少しもかはらずものせんと思人なるまじければ、然か／あるこそ吾物なるへけれ、今の禪宗もわたりこしはじめは、達磨／宗とてあらぬ物の譬にもせり、無_レ宗是宗など、いひて、／いと心高きものを、目なれたる物の異物なるには心がつかで、／新なるもの、宜をも、異物といひ_(重書本)なす世なり、うたも又／しかり、／

○小倉殿人、丹羽相馬と云人きたりて、吾にかたらひける／時、まづある。〈人の_(右本)〉ところに立よりて、己れが在所をたつねつるに、／そこの主人、うたよむ人にて、相馬に問て云、君がうたは新体」(二四丁巻)

か古体かと 相馬いはれけるには、新体か古体かと問れては、／いはんすべなきやうなれど、強ていは、新体にもあるへし、と／いひきと己_(其本)にかたられたり、世に早くより、新体、古体と云こと、／や、云來れとも、今はさる詞いひかたき時になりて、物事ひ／らけたれば、問さまの不調法なる故、右の答あり、かの二條家／冷泉家と、復古の古言家の哥は、新体古体といはては、／言やすからねは、左も云へきを、君の哥は新体か、古／体かと云時は、新体といはずして、何ぞ、己れ天保の民本_(見消本)本_(右本)の〈の_(右本)〉／哥なるをや、何も今なる物を、」(二四丁巻)

○香川景樹が集 桂園一枝、己八九年前書肆にて／ふと見しに、其名に目がつかで、凡人の集ならめとあなづり／た

なり、狩野家／の画よしともその画(見消)よし(見消)きはあしきなり、歌も同じく、人にて風は／たかへと、よきはよし、唯吾好む所を以て、世間の廣き物の／善凶を、定むることなかれ、世間の人已が好むかたに譽なして吉凶を云こと常なり／

○うたはをさなかれと云こと、昔よりのをしへあり、されど、／うたのみを、幼なくよむにはあらし、すべて此をさなきは、人／の實(ふた)なれは、今日の言語に、心を付けてきくへし、いかなる人も、をさ／なきことを云、是則哥のをさなきなり、吾身と引きはなたずして、」(二六下巻)

直語を以てうたをよまは、をさなき言(こはれ)、眼前にあるへし、／

○伊勢人、荒木田久守、己がうたを見て、など體を／同じくはよまぬといひきと、同じ伊勢人のかたりき、さる／ことも有べしいかさま同じ体にもみよみたきことなれど、自ら／まじはる(見消)は(見消)近古に習たる故なり、古今集の哥忠岑／

へ山ざとは秋こそことにさびしけれ、しかの鳴音に、目をさ／ましつ、又同じ人のうたに同集雜／
へ落たきつ、瀑布の水上年つもり、老にけらしな、黒き筋」(二六下巻)

なしと、よめる同体ならんや、山里はのうたは、其比の体にて、瀑／布のうたは、そのさま古し(見消)にのほりて、今の京のはじめと(見消)も(見消)き／こゆ、かく同し。へ人にも同(見消)も(見消)体にも(見消)ならぬが自然のことに(見消)てい(見消)か、はせん、これは／中に立たる人のき、たかへ(見消)にも(見消)へて悟りし(見消)に(見消)やあるらん、すべて(見消)体を(見消)同じく／せんは撰む時(見消)にて、俳諧はは小
かい雜は雜四季戀／なと、撰むことなり／

○おの和歌にぞして曰来うたは月花を咏ものにはあらず、その月花につけて、吾／心を言ものなり、かくをしへたるは、心を種とすることを忘れじ、」(二七丁表)

月花の講釋うたをよませじとて云なり、己れをおきて、／月雪のうへのみいへは、自身はいかにありても、うたはうた／にて別物となる、後世これになかる、歌多ければ、さる本の意／をしらしめ。へんと(右来)て、月雪を讀ものにはあらずとをしへたり、さ／れば、月花をのそきて、吾心を云のみにても、よろしかるへきを、／目に(重書)のかゝる所の月雪、耳に聞ところの鳥声、うたの種とな／れば、それにつけん(見消)て(右)感嘆すへきことなり。へ(余自行問書込来)○

○己が家せまく、いやしきは、云もさらなれど、山野、凡そ／十里餘りの眺望ありて、丑寅より未ひつじ未さる来申まで、よく」

(二七丁表)

見え、橋も四つ五つ行人なとも見え、月によく、雪によければ、／随分の美觀なるを、よしともあしとも不来云し而、歸る人／あり、又常々折々訪人とても、日々(見消来)のさまは見まほし／かるへきを、障子をだにあけずして、歸るあり、俗人はさも／あるへし、詩歌のことなどを、あくばかりかたらひて、風用(見消来)景(右来)を／小(宋消)はず、見ずして歸るはいかにぞや、以歌為歌と云ことは、／こゝにあるへし、山があはれなる、花がおもしろき、川がきよき／など歌にいふは、何を見てさは云らん、ある人、女郎花の／うつろへるを見て、今がさかりならん、など、云て見木(見消来)け

(右来)り、」(二八丁表)

是もうた讀人なりければ、己れこゝ(一書)わ(五)へ(五)ろ(五)のうちに。へをかしく、(五)たま(五)く花を／見れば斯の如し、吾庭の女郎花、早實になれるを、かく云は／なかく、風雅の目にやといはまほしかりし、ちからなき事／どもなり、古今集に、／

へ女倍(マ)芝、吹過てくる秋風は、目には見えねど、香こそしるけれ、／

これは女郎花の香をかぎしれるなり、すべて梅の香は／いふもさらにて、藤の花きくの花、いづれも異なる香／のするを、昔人はよく匂(か)ひしりてぞ在けん、是も花をめづる／よりの事なり、此うた。(正歌也)へか終句(五)しるけれど、よめる、たゞ匂(五)のへかほりの(五)するのみ(二八丁巻)

ならんや、女郎花の香と、き、しれ、は、しるけれといへる也、／今人とは、いたくかはりあることをしるへし、

○人の面のかはるごとく、うたも人にて別々なり、其性質、／松もあり、竹もあり、柳もあり、梅もあり、いづれも同しか／らず、さらにうこくましき所あり、師なる人あやまりて、／柳の性を松にせん(五)とゆ(五)へし(五)、竹のうまれ付を、梅にせん(五)とす、／また学ぶ人、さることかと思ひ、同しく己か性質よき／ところあるも、あしき所あるも、しひて齏(五)せんとす、いたく／あるへからさることなり、松の性は、松を以てよきに長し、」(二十九表)

柳は、柳を以長せんこと云に不(五)及(五)、さすれば己がうま／れ付のことなれば、松の勇壮なる、竹の真直なる、柳の／たをやきたる、己が性にまかせて長し、とり／めにたくなるへし、さるを、教あやまりて、しひたること／するより、松も生涯柳の風を作り、竹も生涯／梅の風をして、終らは己か性の美なる所はあら／はれずてあら

